

現代企画室がいざなう

# 「ラテンアメリカ文学の森へ」フェア

## ——その奥深き、豊饒な世界

ラテンアメリカ文学は20世紀後半に本格的に世界の他の地域へと紹介されはじめ、それまで欧米諸国一辺倒であった「世界文学」の地勢図に変更を迫るほどの衝撃をもって、広い読者層に迎えられました。また、その豊饒な作品世界は、各地の作家たちにも多大な影響を及ぼし続けております。日本でも、1970年代以降現在に至るまで、およそ40年をかけて、ラテンアメリカ文学の紹介は着実に続けられてきました。

今回の「ラテンアメリカ文学の森へ」フェアは、ラテンアメリカ文学・思想書の紹介の一翼を30年間にわたって担ってきた現代企画室の関連書籍を軸にしながら、現代ラテンアメリカからあふれ出ている〈広義の文学世界〉へと皆さまを誘うために企画されました。

(目次)

- 現代企画室・セルバンテス賞コレクション
- 現代企画室・ラテンアメリカ文学選集
- 太田昌国が考える、ラテンアメリカ文学 58冊
- 寺尾隆吉選書 邦訳で読むラテンアメリカ文学のベスト20作品プラスワン

—リブロ池袋本店—

## ●現代企画室セルバンテス賞コレクション

『ドンキホーテ』の作者セルバンテスにちなんだ、スペイン文化省による文学賞。このスペイン語圏で最も権威のある文学賞の受賞作家を順次紹介するシリーズ。円熟した作家の初訳作品から、新進気鋭の野心作までスペイン、ラテンアメリカの豊饒なスペイン語圏文学の世界。 \*既刊10冊、続刊。今フェアではラテンアメリカの作家をピックアップ。

エルネスト・サバト『作家とその亡霊たち』1979 (2009)

マリオ・バルガス・ジョサ『嘘から出たまこと』1990 (2010)

アドルフォ・ビオイ＝カサーレス『メモリアス』1994 (2010)

フアン・ヘルマン『価値ある痛み』2002 (2010)

フアン・カルロス・オネッティ『屍集めのフンタ』1964 (2011)

セルヒオ・ピトル『愛のパレード』1984 (2011)

カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』1958 (2012)

### [凡例]

- ・著者名『書名』の次の年号は、原書の発行年です。その後ろにカッコで囲んで、邦訳書の出版社、邦訳書（最新版）の発行年を記しました。
- ・現代企画室のシリーズについては、邦訳書出版社を省略しました。
- ・原書の刊行年がない本は、日本で編まれたものです。
- ・版元品切れ品（2012年5月現在）は、書名の後に▲を付しました。

●現代企画室・ラテンアメリカ文学選集

われわれの生きる時代と世界を映し出す文学。

往年の名作家のものから、他では読めない隠れた名作までを紹介する  
定評あるシリーズ。装丁／粟津潔

マヌエル・プイグ『このページを読む者に永遠の呪いあれ』1980 (1990)

ルイサ・バレンスエラ『武器の交換』1982 (1990)

オクタビオ・パス『くもり空』1983 (1991)

ガルシア・マルケス『ジャーナリズム作品集』1976 (1991)

マルタ・トラーバ『陽かがよう迷宮』1967 (1993)

バルガス＝リョサ『誰がパロミノ・モレーロを殺したか』<sup>▲</sup>1986 (1992)

アベル・ボッセ『楽園の犬』1983 (1992)

ホセ・マリア・アルゲダス『深い川』1958 (1993)

アドルフォ・ビオイ＝カサーレス『脱獄計画』1945 (1993)

カルロス・フエンテス『遠い家族』1980 (1992)

フリオ・コルタサル『通りすがりの男』1977 (1992)

オマル・カベサス『山は果てしなき緑の草原ではなく』1982 (1994)

グスタボ・サインス『ガサボ (仔ウサギ)』1965 (1993)

アリエル・ドルフマン『マヌエル・センデロの最後の歌』1987 (1993)

ホセ・ドノソ『隣りの庭』1981 (1996)

## ●太田昌国が考える、ラテンアメリカ文学 58 冊（版元品切れも含む）

太田昌国（おおた まさくに）

現代企画室編集長。1943年、北海道釧路市に生まれる。現代企画室に勤務しつつ、南北問題・民族問題にかかわる研究・諸活動に従事。ボリビアの映画集団ウカマウとの協働作業（自主上映・共同制作）は30年に及ぶ。

著書：『「拉致」異論』（太田出版、2003年、現在は河出文庫）『「国家と戦争」異説』（現代企画室、2004年）、『暴力批判論』（太田出版、2007年）など

### ◆文学バザール

革命・独裁・亡命・魔術的・クレオール・狂気——何から何まで豊穡にあるのが、ラテンアメリカ現代文学の世界です。他の棚には置かれていない、さまざまな主題への入り口を、ここでは用意しました。

杉山晃『南のざわめき』（現代企画室、1994）

同上『ラテンアメリカ文学バザール』（同上、2000）

ロドリゴ・レイローサ『その時は殺され』1997（同上、2000）

同上『アフリカの海岸』1999（同上、2001）

同上『船の救世主』1991（同上、2000）

レイナルド・アレナス『ハバナへの旅』1990（同上、2001）

グリッサン『レザルド川』1958（同上、2003）

エベリオ・ロセーロ『顔のない軍隊』2007（作品社、2011）

フアン・ルルフォ『燃える平原』1953（水声社、1990）

マルケス『わが悲しき娼婦たちの思い出』2004（新潮社、2006）

マルケス『エレンディラ』1972（ちくま文庫、1998）

ブイグ『蜘蛛女のキス』1976（集英社文庫、1982）

ボラーニョ『野生の探偵たち』1998（白水社、2010）

フェルナンド・バジェッホ『崖っぷち』2003（松籟社、2011）

デスノエス『低開発の記憶』1965（白水社、2011）

ドルフマン『世界で最も乾いた土地』2004（早川書房、2005）

マルコス・アギニス『逆さの十字架』1970（作品社、2011）

ボルヘス『七つの夜』1980（岩波文庫、2011）

同上 『詩という仕事について』2000（岩波文庫、2011）

同上 『続審問』1952（岩波文庫、2009）

コンフィアン『朝まだきの谷間』1993（紀伊國屋書店、1997）

エミリオ・ロセーロ『無慈悲な昼食』2009（作品社、2012）

エミリオ・パチェーコ『メドゥーサの血』<sup>▲</sup>1963（まろうど社、1998）

◆先住民族世界からの／への眼差し

5世紀前の、ヨーロッパによるアメリカ「征服」——この史実は、この大陸のみならず、世界全体の近代以降の歴史にただならぬ影響を及ぼしています。「征服」されたかに見える先住民族の声が、あるいはその世界への眼差しが、近代を照らし出します。

アルゲダス『深い川』1958（現代企画室、1993）

同上 『ヤワル・フィエスタ』1941（同上、1998）

同上 『ダイヤモンドと火打ち石』（彩流社、2005）

同上 『アルゲダス短編集』1933～45（彩流社、2003）

セプルベダ『ラブストーリーを読む老人』<sup>▲</sup>1989（新潮社、1998）

カルペンティエール『失われた足跡』<sup>▲</sup>1976（集英社文庫、1984）

リゴベルタ・メンチュウ『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』<sup>▲</sup>1985（新潮社、1992）

バルガス・リョサ『密林の語り部』1987（岩波文庫、2011）

◆複数の声を伝える女性作家たち

男性原理が優位性をもって貫徹している人類社会にあって、女性が発する声は、次第にその底力を示しつつあります。〈ひとつ〉に固執する男性原理を離れて、〈複数の〉声を伝える女性作家の作品群です。

ビオレッタ・パラ『人生よありがとう』1970（現代企画室、1987）

ルイサ・バレンスエラ『武器の交換』1982（同上、1990）

マルタ・トラーバ『陽かがよう迷宮』1967（同上、1993）

エレナー・ガーロ『未来の記憶』1963（同上、2001）

ロサリオ・フェレ『呪われた愛』1986(同上、2004)  
レストレーボ『サヨナラ』2006(同上、2010)  
ダンティカ『アフター・ザ・ダンス』2002(同上、2003)  
ダンティカ『骨狩りのとき』1998(作品社、2010)  
ダンティカ『愛する者たちへ、別れのとき』2007(作品社、2010)  
イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』1982(河出書房新社、2009)  
『ガブリエラ・ミストラル詩集』<sup>▲</sup>1974(小沢書店、1993)  
ジャメイカ・キンケイド『川底に』<sup>▲</sup>1983(平凡社、1997)  
ジャメイカ・キンケイド『小さな場所』<sup>▲</sup>1988(平凡社、1997)

◆表現の世界を広げる証言文学

ラテンアメリカの過酷な歴史と現実、実際に起きたことを記録する証言文学ともいうべき世界でも、多様な表現を生み出しています。青春紀行文学から、オーラル・ヒストリー、手練れの作家による記録文学、政治評論などです。

チェ・ゲバラ『増補新版モーターサイクル南米旅行日記』2003(現代企画室、2004)  
ドミティーラ『私にも話させて』1976(同上、1984)  
ベアトリス・バラシオス『「悪なき大地」への途上にて』2004(同上、2008)  
マルコス『老アントニオのお話』1998(同上、2005)  
同上『ラカンドン密林のドン・ドゥリート』1998(同上、2004)  
ドルフマン『ピノチェト将軍の信じがたく終わりなき裁判』2002(同上、2006)  
マルケス『戒厳令下チリ潜入記』1986(岩波新書、1986)  
エメ・セゼール『帰郷ノート・植民地主義論』1939～55(平凡社、1997)  
フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』1952(みすず書房、1970)  
マルケス『ジャーナリズム作品集』1976(現代企画室、1991)  
同上『幸福な無名時代』<sup>▲</sup>1983(筑摩書房、1991)  
エレナ・ボニアトウスカ『トラテロルコの夜』1971(藤原書店、2005)  
フリオ・コルタサル『かくも激しく甘きニカラグア』<sup>▲</sup>1983(晶文社、1990)

## ●寺尾隆吉選書 邦訳で読むラテンアメリカ文学の、ベスト 20 作品プラスワン

寺尾隆吉 (てらお りゅうきち)

1971年名古屋生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了(学術博士)。メキシコのコレヒオ・デ・メヒコ大学院大学、コロンビアのカロ・イ・クエルボ研究所とアンデス大学、メリダ校など6年間にわたって、ラテンアメリカ各地で文学研究に従事。政治過程と文学創作の関係が中心テーマ。現代企画室セルバンテス賞シリーズの企画・監修者。現在、フェリス女学院大学国際交流学部准教授。

著書(日本語):『フィクションと証言の間で—現代ラテンアメリカにおける政治・社会動乱と小説創作』(松籟社、2007)。

訳書:エルネスト・サバト『作家とその亡霊たち』(現代企画室、2009)、オラシオ・カステジャーノス・モヤ『崩壊』(同、2009)、マリオ・バルガス・ジョサ『嘘から出たまこと』(同、2010)、ファン・ヘルマン『価値ある痛み』(同、2010)、ファン・カルロス・オネッティ『屍集めのフンタ』(同、2011) カルロス・フェンテス『澄みわたる大地』(同、2012)。

ここ数年の間に、作風の異なるさまざまな現代ラテンアメリカの作家たちの作品を次々と翻訳・紹介されている寺尾隆吉さんに、「ベスト 20 作品プラスワン」を選んでいただきました。寺尾さんが書かれた各作品の紹介の文章は、現代企画室のホームページ (<http://www.jca.apc.org/gendai>) でご覧になることができます。

### 1 リアリズム文学の伝統

マシャード・デ・アシス『**プラス・クーバスの死後の回想**』1881(国際語学社、2009)

カルロス・フェンテス『**澄みわたる大地**』1958(現代企画室、2012)

マリオ・バルガス・リョサ『**都会と犬ども**』1963(新潮社、2010)

マリオ・バルガス・リョサ『**世界終末戦争**』1981(新潮社、2010)

オラシオ・カステジャーノス・モヤ『**崩壊**』2006(現代企画室、2009)

### 2 カリブ世界と魔術的リアリズム

ミゲル・アンヘル・アストゥリアス『**グアテマラ伝説集**』1930(岩波文庫、2009)

アレホ・カルペンティエール『**この世の王国**』1949(水声社、1992)

フアン・ルルフォ『**ペドロ・パラモ**』1955(岩波文庫、1992)

ガブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』1967（新潮社、2006）

ガブリエル・ガルシア・マルケス『族長の秋』1975（集英社文庫、2011）

### 3 ラプラタ地域と知的幻想文学の潮流

アドルフォ・ビオイ・カサーレス『モレルの発明』1940（水声社、2008）

ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』1944（岩波文庫、1993）

アウグスト・モンテロソ『全集 その他の物語』1959（書肆山田、2008）

ホルヘ・ルイス・ボルヘス『創造者』1960（岩波文庫、2009）

フアン・カルロス・オネッティ『屍集めのフンタ』1964（現代企画室、2011）

フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』1981（岩波書店、2008）

### 4 詩集、回想録、エッセイ集など

オクタビオ・パス『弓と豎琴』1956（岩波文庫、2011）

レイナルド・アレナス『夜になる前に』1992（国書刊行会、2001）

ロベルト・ボラーニョ『通話』1998（白水社、2009）

フアン・ヘルマン『価値ある痛み』2001（現代企画室、2010）

プラスワン

『ラテンアメリカ五人集』（集英社文庫、2011）